

先端研究拠点事業（国際戦略型）の事後評価結果

領域・分野	医歯薬学・外科系臨床医学
拠点機関名	東京医科歯科大学難治疾患研究所
研究交流課題名	骨・軟骨疾患の先端的分子病態生理学研究の国際的拠点形成
採用期間	平成 16 年 4 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日
日本側コーディネーター（職・氏名）	教授・野田政樹
交流相手国 （国・拠点機関・コーディネーター）	米国・ハーバード大学 （教授・Henry M. Kronenberg）
	カナダ・トロント大学 （教授・Jane E. Aubin）
	オーストリア・ウィーン大学 （所長・Erwin Wagner）

1. これまでの交流を通じて得られた成果

当該研究交流課題を実施したことによる国際学術交流拠点の形成、成果の学術的価値、若手人材養成への貢献度等につき、どの程度成果があったかの評価。

評 価

- 十分成果があった。
 概ね成果があった。
 ある程度成果があった。
 ほとんど成果が見られなかった。

コメント

東京医科歯科大学を中心とした骨・軟骨疾患に関する研究レベルは非常に高く、拠点機関と国内、国外の諸機関の間で、それぞれの特徴を生かした形で相補的な学術交流拠点が形成されている点で評価できる。特に、先端研究推進フォーラムを5年間で多数開催し、互いの交流活動も活発であり優れた拠点として継続的に活動した。

また、非常に高い学術的成果が拠点参加メンバーより発表されており、中でも成果として発表されている論文の内容が大変高度で、Nature、Cell 等掲載誌のレベルも非常に高い。

若手研究者の育成は大きな柱として掲げており、若手研究者ネット会議が多数開催され、参加者が数多くの学会賞を受賞するなど十分な成果をもたらしたとともに、小規模なセミナーなどでシニアとジュニアが一堂にディスカッションをしたことは大変素晴らしい。

このような質の高いシンポジウム、セミナーの開催は情報集約性、社会貢献性の点からも評価できるが、研究者コミュニティに対する貢献は十分と考えられるものの、この交流活動そのものの社会的認知を促進する特別の手段は必ずしも戦略的にとられていないようであった。

2. 事業の実施状況

事業の戦略性、拠点形成に向けた実施体制への評価。

<p>評 価</p>
<p> <input checked="" type="checkbox"/> 非常に効果的に実施された。 <input type="checkbox"/> 概ね効果的に実施された。 <input type="checkbox"/> ある程度効果的に実施された。 <input type="checkbox"/> 効果的に実施されたとは言えない。 </p>
<p>コメント</p>
<p> 拠点機関内の運営体制は、学長が積極的に関与して本プログラムを推進した形跡が認められる。拠点リーダーや参加メンバーの強い絆による参加校間、参加研究者間での連携、また機関の事務組織をあげての支援は、大変評価できる。 </p> <p> 特に、拠点リーダーが我が国及び世界の学会・理事に選任されて活躍している点や本事業の主要なメンバーが、骨と関節の領域における主要学会（アメリカ骨代謝学会、国際骨代謝学会）の理事、学術誌（JBMM）の編集者として参加し諸外国へアプローチを行っている点などは、本領域における拠点機関の存在感を高める上で極めて重要であり、計画的に拠点化が図られており、きわめて戦略的な取り組みと評価できる。 </p> <p> また、骨組織疾患研究における世界的な研究拠点形成を目指し、21世紀 COE プログラム、グローバル COE プログラムとも連携させながら、研究機関の特色の抽出とその具現化、研究実施体制の整備に努めた点も大いに評価できる。 </p> <p> ただし、連携体制においては、優れた成果を生み出す体制にとどまり、日本の中で関連する連携機関を束ねる真のオールジャパン体制とは必ずしもなっておらず、本事業が日本のプレゼンスを高めるための事業であることを考慮すると、国内外の機関が連携して今後のさらなる展開が期待される。 </p>

3. 今後の展望

今後も、複数の学術先進諸国との間で、我が国における先端研究交流拠点として、学術国際交流の発展に継続的な活動が期待できるかどうか、拠点としての代表性への評価。

評 価

- 大いに期待できる。
- 概ね期待できる。
- 一層の努力が必要である。
- 期待できない。

コメント

これまで実施してきたプログラム内容は、大変すばらしいものであり、本事業の成果であろう。今後も関連領域に関する国際シンポジウムの開催、若手も含めた研究者交流が本拠点機関を中心として企画されており、本事業の継続的な発展が期待されるが、従来の事業をそのまま継続することは財政的にも厳しいと思われるので、いくつか焦点を絞って、最も重要と思われる事項を取捨選択していくことも必要であろう。

本事業のコーディネーターがグローバル COE の拠点リーダーとして、今後とも国際的研究教育活動に参画する可能性が高く、新たな連携機関の在り方や、連携そのものの在り方などを考慮して、どのように国内外の優秀な若手をリーダーとして育て・活用するのか、より明確な戦略が望まれる。

4. 総合的評価（書面評価）

評 価
<p><input type="checkbox"/> 当初の目標は想定以上に達成された。</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 当初の目標は想定どおり達成された。</p> <p><input type="checkbox"/> 当初の目標はある程度達成された。</p> <p><input type="checkbox"/> 当初の目標はほとんど達成されなかった。</p>
コメント
<p>これまでの成果に関しては、拠点機関と国内外の諸機関の間で、それぞれの特徴を生かした形で相補的な学術交流拠点が形成されており、多くのマスコミ報道などもなされ、研究活動への認知は進んだものと判断される。</p> <p>若手研究者の育成に関しても、色々な取り組みをしており、若手ネット会議とシニア研究者が融合的に連携して、若手研究者を指導する試みは評価できるが、このような取り組みのほかに、若手研究者の長期海外派遣などの取り組みをもっと積極的に実施した方が良かった。</p> <p>また、当初の目標として掲げた中の1つに「4ヶ国の研究を融合かつ、発展させ新たな研究領域を切り開くこと」が挙げられているが、研究成果として記載されているものの中で、2～3の研究論文に共同執筆による成果はみられるものの、4ヶ国の研究を融合して共同研究の形で成果を公表したと思われるものがみられず、交流相手国の研究を融合して共同研究の形で成果を公表することが望まれる。</p> <p>関連領域に関する国際シンポジウムの開催が本拠点機関を中心として企画されていることなども考慮して、本事業の継続的な発展を期待する。</p>